

研究区分	教員特別研究推進 地域振興
------	---------------

研究テーマ	重症心身障がい児が最善の生活するために COVID-19(コロナ)との共生を視野に入れた看護実践の課題				
研究組織	代表者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	池田 麻左子
	研究分担者	所属・職名	静岡県立こども病院・副看護部長	氏名	小澤 久美
		所属・職名	聖隷おおぞら療育センター・小児看護専門看護師	氏名	真木 希
		所属・職名	中野区こども発達センターたんぼぼ・小児看護専門看護師	氏名	仁宮 真紀
	発表者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	池田 麻左子

講演題目	重症心身障がい児が最善の生活するために COVID-19(コロナ)との共生を視野に入れた看護実践の課題
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>【研究の目的】 本研究の目的は、COVID-19(コロナ)による感染拡大を理由に利用者（重症児）と親や家族との面会制限の現状とその影響を明らかにし、感染状況下での看護実践の課題を検討することである。</p> <p>【成果及び今後の展望】 <u>データ収集方法</u>：小児専門病院に入院する患児への面会状況については、病院訪問時や小児看護学実習時に、病棟管理職方の情報提供や入院患者への面会の様子を介して、面会制限の有無について状況を把握した。地域で生活する重症心身障害児・者（重症児・者）を受け入れている施設においては、入所と通所の面会状況について、研究分担者が所属する施設の状況を基に、小児看護専門看護師との意見交換によって、重症児・者施設の利用者への面会の現状を得た。</p> <p><u>結果および考察</u>：小児専門病院に入院する患児への面会状況は、国の感染対策や県の感染対策基準に基づいて、小児の感染状況や重症化を踏まえた感染症専門医と看護部との検討により、概ね感染拡大前と同様（平常）の院内基準に則った面会状況になっていた。重症児・者施設のうち入所施設においては、小児専門病院とは異なり、対面での面会は中止され、希望者する家族へのオンライン面会が主流であった。感染拡大の緩和に伴い、対面面会を開始する施設もあったが、面会時間、面会者の制限は継続していた。そのため、家族の不安や不満足感、諦める声も維持されていた。通所施設においては、面会が不要であること、利用者の感染リスクがある場合の利用の自粛が徹底され、改めて面会に対応するシステムを構築する必要はなく利用者や送迎者による施設内への感染拡大は生じていなかった。小児専門病院と重症児・者施設における面会状況の違いには、重症児がもつ基礎疾患によって死に至ることを懸念した重症化の回避、施設内での感染拡大（アウトブレイク状態）時に必要となる人的、物的資源の不十分さの現状、感染経路が特定できない現状は感染経路を遮断する術を確定できない不確かさが考えられた。一方で、小児専門病院と重症児・者施設共に、COVID-19(コロナ)による感染が生じている状況もあり、面会制限の有無との関連は明らかにされていなかった。</p> <p><u>今後の展望</u>：基礎疾患がある重症児・者が、COVID-19(コロナ)感染による致命的な重症化を回避することは、重症児者の生命やQOLを維持する上で最重要とされる課題である。COVID-19(コロナ)感染症が5類対応となる国の動向において、重症児・者の重症化リスクを踏まえた対策は引き続き必要となる。COVID-19(コロナ)との共生においては、面会制限が及ぼす利用者（重症児・者）への影響を精査し、感染経路を断つ手段としての妥当性と共に、不要な制限を回避する看護実践が必要であると考えられる。</p>